

リハ専門相談 事例紹介シリーズ⑥

電話相談と訪問支援から見えてくるもの

リハビリテーション専門相談は、主に「居宅介護支援事業所」や「障害者施設」「障害者相談支援事業所」等の機関からいただいています。相談内容は、疾病の進行や加齢に伴う機能低下や身体状況の変化に応じた生活場面での住環境整備や補装具・福祉機器導入、訓練プログラムに関するものが多く、電話や実際に訪問して助言等を行っています。これらの相談から見えてきた課題と当センターが担っていくべきいくつかの役割があります。

- ① まず、脳性まひや神経・筋疾患の方について、病状の進行や加齢に伴う機能低下への対応です。今まで出来ていた活動が出来なくなる、姿勢の保持が難しくなることは、生活に支障を来すだけではなく、ご本人や家族も受け入れに時間を要します。ただ、残された機能を生かしつつ、生活の質の向上を目指すには、適切な身体機能評価を行い、現状に適した補装具利用やポジショニング、介助方法の工夫や福祉機器の導入が考えられます。
- ② 上記に類似していますが、知的障害者の加齢による身体機能低下への対応もあります。知的障害者は40代後半から身体機能が低下する方が多く、それらより活動量や姿勢、嚥下機能等が連鎖的に低下していく場合があります。よって、加齢に伴う心身状況にあった日中活動の位置づけが要されますが、自身の状態を適切に伝えることが難しく、支援者側の助言等を理解したり、ならったりすることもままならない状態ではなかなかうまくいかないようです。そこで、生活状況や身体機能の評価をふまえた生活環境の再構築（椅子やテーブルの高さの調整等）や、生活の中で無理なく取り入れられそうな運動やストレッチ等を検討します。
- ③ さらに、難病の方へのコミュニケーション支援があります。障害像や身体機能、病状の進行だけではなく、本人や家族の生活ニーズ、元々得意としていた能力（例えばPC操作）等を考慮しつつ、コミュニケーション機器や入力機器等の周辺機器の選定や調整を行っています。手続きに時間がかかりすぎると進行が早くて機器の利用が間に合わないこともありますが、その反面、病状の進行等に関する知識や情報を有している支援者側が、本人や家族の状況の受け止めや思い、ニーズよりも先回りしすぎた支援をすることで、準備した機器の使用を中断してしまう例などもありますので、ご本人・家族の意向と適切なタイミングを見計らう必要があります。

地域生活の中では、通所機関や訪問介護、訪問リハ等の方が長期間の支援を行っておいですが、リハ職が不在な機関やリハ職の方においても、身体機能面の把握や理解、本人の状態と福祉機器のマッチングに不安な面もお持ちだと思えます。そのような局面で、当支援センターのリハ専門相談を活用いただき、地域支援機関の皆様とともに支援方法や環境調整を検討していきたいと考えています。

(瀧澤 学)